
幸福増進剤

3 2 8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福増進剤

【Nコード】

N3054Z

【作者名】

328

【あらすじ】

家庭は裕福で何不自由なく育ったはずの19歳の男の子が家を飛び出し、

友人の紹介で夜の世界で働くことに・・・

まともに仕事もしたことなかった彼だったが、

なかなかの気品のある顔立ちと得意とする嘘と偽りの笑顔で

大金を稼ぐようになった。

その代償に大金を稼げば稼ぐほど
彼の心は荒み、汚れ、壊れていった・・・

そんなある日、
『幸福増進剤』という奇妙な薬を職場の先輩から
もらった。

彼の人生が大きく変わり始める・・・

この物語はフィクションです。

処方箋

、幸福増進剤、

k o u f u k u z o u s h i n z a i

幸せを増進させる薬。

処方箋

使用・服用方法

1週間に2回まで服用できます。

1度服用したら次の服用までに
3時間はあけて下さい。

炭酸飲料でお飲み下さい。

効能・効果

幸福そのものを与えるものではなく、不幸、苦痛などをやわらげる薬です。

副作用・注意事項

幸福な人は服用できません。

アルコールで服用しないで下さい。
間違った用法・用量では、効果が期待できなかつたり、副作用が
でることもあります。

保管方法

直射日光を避け、冷蔵庫内で
保存して下さい。

吉井慶太（19）

俺の家は、他人から見れば「幸せ」「裕福」「金持ち」
こんな感じだと思う。

実際、俺は「幸せ」とは思っていない。

だが、不幸とも思わない。

人生がつまらない。

一生このまま生きていくのだと思うと
嫌でたまらなかった。

だから俺は黙って家を出た。

治安のいい街ではなかったから、世間一般で言う悪い仲間って奴も

沢山いた。

その中で1番仲が良かったのが峯岸拓真。

こいつは、情に熱く涙もろくていい奴で俺は好きだった。

俺が悩んでいたたり、落ち込んでいたりすると一番に気付いてくれる
そんな奴だった。

家を出てすぐ拓真に電話し、簡単に家出の説明をしたら

しばらく拓真の家に住めることになった。

拓真は中学の頃に両親を亡くしてから
ずっと一人暮らしだった。

そんな拓真の家は、不良の溜まり場、そんな感じだった。

拓真の家に住み一ヶ月近く経った頃だった・・・

「腹減ったなあー」

「やばいな、俺もつお金尽きた」

「稼げるバイトねえかなー」

「遊んでお金もらえりゃいいのに」

そんなくだらない会話から拓真と俺は
夜の世界で働くことになった。

ホスト

拓真の先輩のSHINさんの紹介で、'ageha'という店でしばらく働かせてもらうことになった。

出勤初日はこの店のナンバーワンの誕生日だったみたいで出勤して三時間くらいで拓真も俺も潰れてしまったが、

翌日からは繁華街を歩く女性に声をかけて、店に上げて嘘八百をならべて心にもないようなことを言ったり、笑顔をつくりSHINさんの教え通り接客をした。

正直、楽だと思った。

俺は一ヶ月も経たないうちに大金を稼ぐようになっていた。

楽してナンバー3になった俺は

「本気出したらナンバーワンなんて余裕だな」

と完全に自惚れていた。

その翌日から俺はプライベートの時間も
削りながら、客へのメールや電話、休日デート
などできる限りの事をやってみた。

翌月、俺はナンバー2になった。

できる限りの事はやったのに・・・

「なんでなんだ・・・？」

苛立ちを隠せなかった。

拓真の家に帰り気持ちを落ち着かせた。

「慶太？そんな落ち込むなよー」

「うつせえーよ」

「ナンバー2でもスゲーって！」

「一番じゃないと何の意味もねえーから」

どうしても一番になりたかった俺は、
抱きたくもない女を何度も抱き高価なボトルやシャンパンを
次々と入れさせた。

破産させた客も何人かいた。

当時の俺は自分の欲を満たす為なら
手段を選ばない最低な人間になっていた・・

あいつが逝ってしまっまでは・・

峯岸拓真（19）

「いつてくる!!」

「おお・・・」

最近慶太に元気がない。

仕事はいつも以上に頑張っているみたいだけど、俺は心配でたまらなかった。

あいつは凄いと思う。

入って一ヶ月そこらでいきなりナンバー入りするし、俺にとって最高で最強の自慢の友達だ。

ナンバー入りしてない俺は、店の掃除やお酒の発注の手伝い、テーブルのセッティングをするのも仕事だから慶太より早くいつも店に出勤している。

「おい！拓真！」

「あっ！SHINさんどうしました？」

「なんかお前顔赤くねえーか？」

「そういえば何か熱っぽいような・・・」

「大丈夫かー？風邪薬あるか？」

「風邪薬なんか飲まなくても大丈夫っすよ！」

「そうか？」

S H I Nさんは俺の大切な先輩で、危ない事もするし、口も悪いけど俺が中学の時、父親が母親を殺して自殺し、俺は荒れていた・・・誰だろうが関係なく喧嘩を仕掛けては暴力を振るっていた。

そんな時、喧嘩を仕掛けた相手が運悪くヤクザだった。ヤクザ数人に囲まれて覚悟を決めた時、近くを通りかかって見かねたS H I Nさんがこんな俺の事を助けてくれた。

俺は可哀想って言われるけど全然可哀想だと思わない。

こんなにいい人が周りにいるんだから。

俺は幸せモノだと思う。

ゾロゾロとみんな出勤して来てお店が開店した。

慶太はいつも同伴出勤だからまだお店には来ていない。

俺は盛り上げ役だから今日もテンションを精一杯上げて接客に挑む！一発目はSHINさんの客のヘルプについた。

「いつらしゃーい…！」

「あー！拓真じゃーん…！」

「ミサちゃん久しぶだねー」

「だねー！SHINは？」

「ごめんねーもうすぐ来るからー」

「んーもう…！」

俺はこういうタイプの子は少し苦手だ。

「あっ！SHIN…！」

「いらっしゃい、久々だねー」

「んじゃ、俺はお邪魔しますねー」

「早くどっか行ってよー」

「はいつ！失礼しますー」

席を立ち次々と来店する客のヘルプについて、

しばらくしてSHINさんにミサの席に呼ばれて行った。

「あー！ホントだ！熱っぽいねー」

「だろ？」

「大丈夫ですよっ」

「えーっと、あつた！はいコレ！」

「なにになに？」

「ミサね、いろんなお薬常備してるからあげるよ」

「ありがとうございます！解熱剤？」

「うーん！痛み止めみたいなものかな？」

「早いうちに飲んで早く治せよー」

「ありがとうございます！んじゅ。」

ミサは精神的な病気で常に色々な薬を持ち歩いている子だった。

俺は、貰った薬をすぐに飲んだ。

30分くらいして足元がフラつき始めた。

「そんなに飲んだかな？」

深夜三時にもなると、いつも店は客でいっぱいになる。

新規の客について珍しく指名をもらった。

今日は何だか気分がよく、会話が弾んだ。

向かいの席にいた慶太と目が合い慶太はニッコリと笑った。

最近慶太の本当の笑顔を見ていなかったから
ホッとして、笑顔がこぼれた。

早朝五時・・・

俺の指名客は帰り、酷い睡魔に襲われた。

「俺、少し寝るから、店閉める時起こしてくれ」

俺は新人の子にそう言って眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3054z/>

幸福増進剤

2011年12月11日00時53分発行